

# 出版翻訳者に求められるもの



## ●プロフィール

井上 健 (いのうえ けん)  
 東京大学大学院総合文化研究科教授  
 東京大学大学院修了。神戸大学助教授、京都大学助教授、東京工業大学教授を経て、現職。専攻は、比較文学、アメリカ文学、翻訳論。著書に、『作家の訳した世界の文学』（丸善ライブラリー、1992）、『現代アメリカ文学を翻訳で学ぶ』（バベル・プレス、1995）、『BABEL 翻訳表現辞典』（バベル・プレス、1996）、『翻訳の方法』（東京大学出版会、1997）、『翻訳を学ぶ人のために』（世界思想社、2005）などがある。Babel University で論文作成の講義を担当。

出版翻訳に必要な基礎知識、専門知識、文章力とは何か。限られた紙幅でそのすべてを語りつくすことなどできるはずもない。以下、述べることは、出版翻訳リテラシー、つまり、出版翻訳に携わろうとする者が、最低限、了解しておくべき認識、知識である。

## 1. 基礎教養はもちろん必要である

アメリカの文芸批評家 E. D. Hirsch の *Cultural Literacy* (1987)、*The Dictionary of Cultural Literacy* (1988) が話題になり、大いに議論をよんだのは、読解力、文章力の前提たる、身に着けるべき基礎知識の範囲を、敢然と指し示した書であったからである。とはいえ、こうした試みが意味を持ったのは、アメリカが富と教養の甚だしい格差社会であるからで、それがそのまま現代日本に当てはまるものでもない。

では現代日本において、翻訳力の前提たる「文化リテラシー」とは何か。誤解を恐れずに言えば、大学受験時に要求される基礎学力がそれなのでは

ないか。若者が本を読まなくなったとは、つとに指摘されることだが、受験競争が緩和されればされるほど、学生はいつそう物を読んだり考えたりしなくなり、教養水準は低下の一途をたどっていくだろう。受験に際して多くの科目を選択して、しっかり勉強した人ほど、「文化リテラシー」は高い。受験勉強をしなかったに等しい人、受験科目の少なかった人は、そこを意識的に補っていく必要がある。

## 2. 専門分野、得意分野はあるに越したことはないが……

職業としての翻訳業が成立し、学術書、専門書は学者・研究者が訳し、一般書は職業翻訳家が訳すという分業体制が確立した今、出版翻訳を手掛ける翻訳家に要求される「専門」知識とは、特定分野の知見を盛り込んだ一般書を翻訳できるかどうかというレベルのものである。自分の専門領域があるに越したことはないが、そうした専門的知見を生かせる翻訳を手掛ける機会は、実のところけっして多くはない。

具体的に述べよう。問題はたとえば、文学部を卒業した人間に、自然科学関係の一般書（いわゆる、ポピュラー・サイエンス系の書）や法律や経済学の知識を必要とする一般書が訳せるかどうかということなのである。1 で述べた基礎教養さえあれば、それは十分に可能なのではないかと思う。また、そうしていかなければ、なかなか翻訳仕事にありつけるものではない。

ここで思い出していただきたいのは、大学時代の一般教養科目で、自分の専門外の単位をいかにして修得したかである。半年授業を受けて、ことによるとたいして出席もしないで、学期末にあわ

ててその分野の入門書を何冊か読んでレポートをでっち上げて、首尾よく単位をとった人がほとんどではないだろうか。あれをやればよいのである。前述した一般書の翻訳に必要とされる専門知識とは、大学の一般教養科目授業半年分程度だと考えておけばよい。

### 3. どうしたら文章力が向上するか

いかなる修練を積めば、文章力は向上するのか。事はある意味、簡単である。

まず第一に、優れた文章で書かれた日本語の書物をたくさん読むこと。優れた文章とはどういうものか、最初のうちはぴんとこなくても、数を重ねているうちに、だんだんとわかってくるものだ。

第二に、まめに文章を書く機会をもつこと。本を一冊読むごとに、字数を決めて（800字から1000字ほどで）、それを要約してみるというのはどうだろう。だらだら書いたのでは練習にならないので、字数を守ることが肝要である。これほど、勉強になることはない。読書力、要約力、文章力がまとめて強化できるのだから、一挙両得とはこのことである。

### 4. 文章のつながり具合に、常に意識的であれ

他人の文章を読むときも、自分自身の書いた文章を読むときも、そのつながり具合に、主語と述語がうまくつながっているかどうか、助詞の使い方は適切かどうかなどに、常に目を光らせているべきである。日々これを実践するのもしないのとは、年単位で考えると、相当に大きな差が生じてくる。これは、筋道の通った文章を書くには、不可欠のトレーニングである。

### 5. 簡明に書く習慣をつけよ

同じ事を言うのだったら、くどくどと述べるよりも、できうる限り、簡明に語ったほうがむしろ効果的である。試みに、メールでも何でも、自分が心の赴くままに書いた文章を、あとでチェックして書き直してみるとよい。ない方がよい部分、あってもなくてもよい部分を、どんどんカットし

てみるのである。どれだけ自分が無駄なことを書いていたか、余分な言葉が多かったかが、ただちに実感されることだろう。こういう作業をまめにやっつけていけば、文章力が向上することは請け合いである。3で申し上げた、字数を決めて書く練習に意味があるのは、それゆえである。

### 6. 一対一対応から頭を切り換えろ

ここから先は、実際の翻訳作業に入ってから注意事項である。言うべきことは数限りなくあるが、何より先に強調しておきたいのは、原文と訳文との一対一的対応に意味がないことを十分に認識すべきだという点である。原文と訳文との間に実現すべきは、等価値性（equivalence）なのであって、一対一対応ではない。英語から日本語への翻訳のように、構造が大きく異なる二言語の翻訳の場合は、ことにそうである。形は変わっても、原文と同等の価値が訳文で実現していれば、それでよいのである。

### 7. 人称代名詞を強く意識しよう

そう簡単な問題ではないし、翻訳するテキストがフィクションかノンフィクションかによって事情は異なってくるのだが、欧文を和文に翻訳する場合、人称代名詞ことに主語の翻訳が、訳文の成否に想像以上に大きな比重を占めていることは、わきまえておくべきである。詳述する余裕はないが、これは、構造上、主語を必須とする欧文と、主語を必須としない和文との間の変換で、不可避に生じる事態なのである。人称代名詞を訳出するのもしないのか、訳出するとすれば、「私」なのか「ぼく」なのか「俺」なのか。とにかく、こうしたテーマを強く意識することが重要である。